

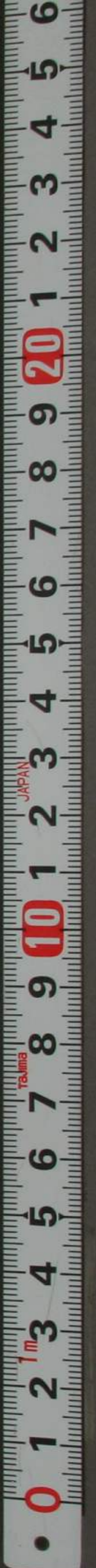


関原軍記

三編十五

十六

特
へ遠13
2207
38



門へ遠13
冊2207
卷98

池清

関ヶ原軍記三編卷之拾五

目録

- 一 佐和山城追手搦手合戦の事
- 一 并石田の長長谷川忠之清返り砦の事
- 一 佐和山落城石田の一衆殲らるる討死の事

翻譯書
 倭軍書
 唐軍書
 隨筆物
 國々名所
 近世戦争書類
 右々外數品内庭比写本覽之程奉願也

書物價目表

東京牛込細工所

誠堂 池田為清書

繪本

曲亭馬琴之作
其外諸先生作

書本

軍書

敵討

諸家騷動

御捌物

滑稽物

并上田東雲并依和山城立返事



関ヶ原軍記三篇卷之拾五

依和山城追手搦手合戦の事

并石田の長谷川忠清返り

忠の事



曰く世席

所下部

全吾中洲之秀秋田中玄部太
博吉政之弟此法軍督依和

山の城攻立り城中随分
お働き一箇夜堅固より持こ
りり然るに城中の長谷川右衛
清運心して金吾の陣にお
りり上りて惣軍の陣にお
けり上田東雲毎夫とて大城
うけく落城するの時に石田が余
顔悉く滅せり奇手孫四郎

城揚る叔父より
井寺より河本陣と云く
ゆりて法軍勢もことごとく
負ふと云ふ
中仙及城御殿白のときあり
志田安房吉同く依事つて
中なる川に御軍勢に敵を
し田の城に石をとりて
内府公のこ
長くあり
秀忠の志

及びあひなり

兵書あつて印をぬり廻く
時よゆ新しけりや立所
出世もるの島九階とのりる
かごごご一ツもひきと違ふ
百端相同ト石田三蔵が立
身も友吉といひの時より
丹津次くく太閤の仕へて

時をとほ出世して新しき
ぬりしきりかかればぬ
ちがひよてまゝあつて
あつて我所は奪りに忘押
して振より見る時よき
送んあつてその所は出世を
重む振りのみ見る後く
人よき礼がらよてあつて

印を立んと名も亦一執り
破色より併しあてり連も
印を立馳あめのこつて此
人も印を立るるの一人の
ころあつたその竹の子の叶り
世に流るるれども石のうへ
もも三年たるとその石
あつたるといふりその印

急務あつて只平生平成
時多印を物あり海して
公事下りあつた徳分有る
成り馳し頼頼も二十余年
此流人地志のぶ
東照宮も七十余年して
天下と一統しあつた
時と待く印を立るるなり

石田三成も太閤時代の執権
城将の山年久しく南分れ
利敵少く調略もつたその
ゆりあり邦れゆり遠ひて
弓矢ありゆり格別あり日頃
欲心増くして徳大名あり
結核決え集りよる徳及具
一且一時に焼亡とこれ

利敵のゆりの一時にせざる
ゆり唯一把の藁決焼亡と
よるがごとくゆりありむ
なり執権一利もなきとせん
を必しゆ奪れたりと制ら
るゆり日づりに執目のも
ち増えゆりゆり次実なり
惜むゆり事あり又世も

少ありり記重宝友之志容
亦在世の扉石田を費一の出
既人有欲得之徳道是欲
入を運び送る人々有り是
亦依て宝蔵有り荒満して
依和山城よの金銀を過分
手納め盡りたりされば物
惜む終へく邦へ出さば今

は其大を撮く一厨子焼失
有りその時を分れ徳道具
失却しては後庵大の直
子あり今子いりて拂
有りこれなる利欲のさう
あり亦子新のさう有り
は其子身禅僧は其衣は其
首山如常やされたる名

なり野々く世々の人金銀
地持ふて始末して肉所お
負鑿の品物と名を合おも
産末ありて只終り辛勞
して金銀地もち及多と買
集めらるる無量ありそ身死
まら財を貯し終る死平り也
及是多積ふ文と布一衣を

ざつと海も折角一生涯骨
お惜まると名ひくらのもの
それく終るまでけけし
よて乞速ひ又我身お意乃
分限よつてきひ長くば何
そと奢る有人のおとくり
て我々の一と次るのま
大欲心也け大欲心の人を

洞略心子 後其人乃樂し
とすら復らね大悪人として
相とのみ地獄の罪人あり
や中りされたり大欲を欲め
立指も存もに名目も
人として欲せられたるは
其種よくしてむやむらも
いふころねきやりにまき

子事一あり其肉の節がん
悪し其の此度依れ山は政荒
法人金銀子うらへん
笑止子万れりありと
ども我人とのみ却れどく
あればこそ世の中は古来の
ご

さういふるを禁せり

とく多し所らりる

らも知らる

とつ心しそ面おらん

去程よ実東の徳大おも悉く
修和山のあ後陣取り金
谷田中がせめ換らるる其終
戦や交く攻めさるりとも
お侍揃へらんば事らん

がゆしと撤責あり爰お金

中納言秀秋の先陣松野平

尾の坂と攻らる櫓屋くらの

依和山なる名峰とし南村の撤る元

を破つ丹波守が居城ありし

四角度破る板の廻る大寺此

不らに折とらん一乃丸の

柵石垣の城あり部て城下小
つ子楯をとりて押する
湖と矢頭をぬりし山回
上那女下知して鉄炮打出
きよしめ先手にきりみし
名士たの谷屋へ追跡さす
手負死人三百余人あり仍て

をみりし只ふりし斗りあり
重む秀秋大さふ怒り比負
りの名う那天下に武士の足る
処毛袖りしとねのわさや
續けと大お秀秋先りきり
より依る金吾の軍気きり
五千余人周の声を揚る
先し楯を突るし鉄炮を

うづまつれ我りくと大おの先
お方よりどののそと押らる城
中よりおれも鉄砲をおんと
まねお皆く揃てくごして少
しお播目ばかり尾の城を
近くぬく一時お牛車も来て
仕合せと身より又城の中より
おの用よまゝ人おければおの

鉄砲づくとおあせりしておをく
狭間とお岡よりお砲急にお
破くんとて責まゝる三乃丸の
山岡と種外もお勢を疑はれ
ば本城よりお勢をくしてお
左もあま 古谷川にお清のあ人
より足輕百あ松人づつ彼を二百
余人のお勢をくして防げば急よ

の所へさとも及べぬ既に申すの目
言ふんとする有徳軍勢も一
引多々へさ中より大將令
中されり今晩引多々ば明朝
の定めて他衆へ 御下知ある
倉へ兵終末山へ陣立て
し進行束と密接へ幕と張て
虎口と去り泥陣へ入り又搦手

此田中多勢を捕も馳下のを
をみしり一時よ急破へんすれ
右道細く後退して武者三人
ともるるびがうに故捕も竹束
毛馳込もんば及是下押色く
しりかうたよ川瀬たすよ今
銃炮打出一く控くもら終り
中へ有馳多く旗下中がよ

舟よりけりれをや言ふおほらぶ
理りるらむ秋の日の額にして
そ水干及ぶべから尾に金巻勢
も引返りざれば何ぞく山よ
陣えくくを糧とば山下より
持運ぶおしと竹葉たげす
おと明りりまのちよ城内
危しく明るべ城はさしと

おりまたり叔人のそまの斗り
かこし石田が近長足程大おま
して平生急いせし古谷川
忠告あしんを愛しそりやく
この城中に抱くかきし人
雲ヶ原に致しし味方殺す
竹方より城をすらすらと南
も那運のそら人々

新多能佐和山城申此長谷川右左衛門
の金吾秀秋の陣中へ通りた
て来りり海が日頃城中に松子の
知りりる故出古谷川を先手葉
内者として金吾の軍会ども
一了み子余人周の声を揚ぐ
攻むる城中より出古谷川に
葉が通りたといふく軍勢

と城少子されきく葉内者
知らるる有実もや階を指るく
山田と神介 赤松右左衛門
手三の丸を破る本城より
是と見て田中玄助を捕る
ふあの手を攻破らる川原左
馬も叶りて本城へ
志りてまきりて二の丸の

時難人の勿論法士も逸失く
本城より集むる軍勢少なるんば
奇手の一討手のみふりて破る
んと欠とり追手此川前平手
身銃を入くるこの男平政破る
んと此城中よりも懸願の者
去討免を極めて宴出く戦
免をとぐるこの侍よその良時よ

本城より集むる軍勢少なるんば
奇手の一討手のみふりて破る
んと欠とり追手此川前平手
身銃を入くるこの男平政破る
んと此城中よりも懸願の者
去討免を極めて宴出く戦
免をとぐるこの侍よその良時よ

隠岐古同く年人正同く李氏同
く右近初めとて女是弱
とばとくく天守くく鬼
角ふ款名及込入く階ぐ名士
か形くくつて東雲舞もすべ
やうくく室飛蹴舞あて金箱
と名お一徳の矢念よりそ
金銀蹴限りるく投出さるあを

寄手此会おも欲心より大の
終ふお一卒そひて控ひる
初めの雑人下く斗りむあひ
らに金銀を控やん投出さる
右境めの武士も控と下は是
金銀を控ひ控ひの引合せ
くくくんと城中よりいやが
く手大勢をりて投出さる故

撤攻のしり忘れをて徳士やうで
追々城とらへりよ来り幸をひて
むらひの奪れ依く執るひれ事
いひしと忘れらるるを以て
しよ有様なり大おあはれと
見く大いしりり不痛を
奴原の邦急ぎお取れ
割せしもの下知り依て徳を
行

再び小魔と持ちどりの老どろも
大勢強集りて不痛をあら
りし邦急ぎ攻められたり内
年しりりごとと金銀
投出せしやと魔と獲りて
お取れありあつそひをんで金
銀をむらり事良久しこの
うらに東雲舟を天守り焼

弟とあむしうぐくせめて徳士
の自害を成す此内千石田隠岐
寺同く年人正同く重臣同く
右近守田下総守山田上野守
赤松左衛門尉お毛日殺る次女中
とば東重守が刺殺す此内
火の手としく城中此徳お徳
士と七拾八人一時に滅して

程又雨にやと掛りこの大
室病し移りて下河原室
とくしくくさび矢きり
城中此雑人右の近隠きて退く
に矢より上田東雲守とこの
人この室助の痛りしを
く我々徳代志家人といふも
何とぞんば是哉同くはるも

及ぶやうに又さういふ死しつる
人々此等提を吊らるん其こそ
増るしめと日比より葉肉の知り
これの振及より撤中と逃れて
増くは天下と思ふして水翁
とて無須の疎播ある妙つと
あつてそとせとてその内及堂家
よ者てその物語りといふ

くると世にゆく四言とてさう
ぬり佐和山の撤を九月十九日
午の刻に落去しつるを
本撤り大熊射に在るの節
首たるとある中より け殺し
攻取交あつては御くといふ
とも不そ尾子万あり
内府公少平列して何の内獲銅

も無し 車ちり年 所發^{あつが}する

以上洛し あり 御本陣 とな

三井寺し 立ち くら 辰く 小徳大將

と大津 杉中 塔田 山料 十員

寺あり 辰余り 石山 寺津 漸

多し 荒満し 赤びき 人毛 洛

中へいり 辰形く 小物 石田の

辰^{とち}守^{まも}知^ち色^{しき}ぶら 存^{ぞん}江^え尾^おの中^{なか}ふ

多^{おほ}べし 一^{ひと}連^{れん}田^{でん}中^{ちゆう}を^を給^{たま}ふ^ま補^ほす^す

命^{いのち}せし 色^{しき}く 尋^{たづ}ね^ねの^のさ^させ^せる^る心^{こころ}

りり 池清

雲ヶ原軍記三編卷の十又終 池清

池清

関ヶ原軍記三編卷之拾六

目録

一 真田昌幸父子三人密議の事

并信幸理を述べて父身と園東の

御味方と対んと斗つる事

一 幸村長言父子是身敵味方と別

る事

并 秀忠公御進發信州大河
御急陣の事

油清

同ヶ原軍記三編卷之拾六

真田昌幸父子三人家法の事
并信幸理を述べて父を以て実在の
内味方お侍んと斗らる事

曰く真田安房守の嫡子信直は
此練女と号し、承久の御代に於て
義兵正一、次男左衛門の依りて

さし候と相りし中一依く父子是貴
款是方と別りし故に田の概
中細言秀忠々々中他及より
御進出候列大河一御急陣

有く志田父子が逆心候
一と進出候列大河一御急陣
有く志田父子が逆心候
一と進出候列大河一御急陣
有く志田父子が逆心候
一と進出候列大河一御急陣

及ぶ真田徳畧と相りし中一依く父子是貴
秀忠々々款是方と別りし故に田の概
中細言秀忠々々中他及より
御進出候列大河一御急陣
有く志田父子が逆心候
一と進出候列大河一御急陣
有く志田父子が逆心候
一と進出候列大河一御急陣

の軍あり

父子信あり 君臣義あり 孝
の時を親子にあらはせしむ
信親といふより孝一より
ありとも孝のゆゑあり
なり 或はひそ世の中此人
孝のといふは 孝の年を
親に養ふなりと 孝といふは

よりなるよ 及ぶとんを
の内ありひの牛馬大猫
此の途皆是より人の畏
あり子に極むる養ふなり
の牛馬も 同ト 只教る
時をふれりて 分るんや
を教ひしむを 親子に
あらはせしむるなり

をこる人遠ざけ退くる
がごとくくわつてきく屈
ふらわの是大人ひり不孝よ
して親の成る遠慮する
亦く故りころりゆらちる
のの若てわく親をば
急ぐ親も子修其年を
忘るべして七計五この料

理え他人他つ的心きひす
産愛より難水軽ぐま
吟ても親子一石子おまん
で心易く陸路く或ひ
是向ひまても物経りまら
るの見物北山の時より
心之樂しみ只は肉より
あつひり又南時果うけて

於^と事^じ々^ざ此^こ時^じの^の事^じ々^ざの^の状^{じやう}を
眠^ねる^るは^は是^{こゝろ}今^{いま}も^も心^{こゝろ}を^を盡^{つく}す^すは^は此^{こゝろ}の^の事^じ
也^{なり}と^とあり^{あり}幸^{さいわい}々^ざと^と平^{ひら}生^{せい}と^とあり^{あり}
同^{どう}ド^ド心^{こゝろ}を^を安^{やす}ん^んず^ずる^る時^{とき}を^を必^{かならず}
ら^らに^にあ^あら^らし^しめ^めば^ば其^{その}時^{とき}に^に父^{ちち}子^こ
の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^りあ^あら^らし^しめ^めば^ば
一^{いっ}時^じの^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^りあ^あら^らし^しめ^めば^ば
存^{ぞん}在^{ざい}す^する^る父^{ちち}母^{はは}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り

富^{とみ}東^{とう}の^の時^{とき}を^を事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り
自^{みづか}ら^らの^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り父^{ちち}子^こは^は
礼^{らい}儀^ぎの^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り不^ふ孝^{こう}乃^{なり}
人^{ひと}と^とあ^あら^らし^しめ^めば^ば此^{こゝろ}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り
也^{なり}と^とあり^{あり}此^{こゝろ}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り天下^{てんか}
此^{こゝろ}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り此^{こゝろ}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り
も^もあ^あら^らし^しめ^めば^ば此^{こゝろ}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り
是^{こゝろ}の^の事^じ々^ざと^とお^おと^とり^り也^{なり}と^とあり^{あり}

刑のぞくせしむるの
何れも君も事なまはり
君臣の君の其主人の恩を
何れも練云三交あ及びく
承りたる時必くは退治
てし成ると造ら又主君礼を
を以て少くも是も千倍
まゝに随湯の妻子と事な

の福とありこれ何の爲ぞや
事件あり時乃用よまんが
とありたり流るる年来終り
一其持録もとるる
急ぬる時よ起りて心と愛
さる者終あり破るひ大猫
もそと知まり是平生の
洲深ある存之存も親決捨

この世の信者なる者も所々
世に全恩を蒙れ強く是れ
及ぶがらも所を推んと
まゝの是れお習といふの義理
あり強き是れ親を父と
習くといふ事ありあはれ
この時ひとやんぐらゝ見ら
れ又併是れ心慮もそ

此の世の平均以後親を
是れ御命と敬ひ奉り信者
一々玉子習く強く父と母
の御命あり御免あり
此時併是れ孝心を以て知
く義心正しきとてまゝ
御免あり

夏子真田安房守昌幸嫡子信直
守信孝次男左衛門依幸村父子
三人の内豊幸村より夫を以て
と吳玉布帛と袖りりりり
羨ん珠石のてりり武勇智謀
精まきり南代の良士志ありり
左衛門信直古今に良將といふ
るる去んば南時

徳川家此智勇の長井伴本多
柳原保も遠く立りりりりり
後も其後の遠りり匹夫の勇
あんとあきり自然に百丈子南
の大將經今に楠正敏なりりり
とりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり
不孝なりて死す是又笑ふ

る愛子之孫なり父安房公の
天正十年武田勝頼滅亡の時少
し年武常たかやうに夫より
後まことありて本願派の
上田乃支城城持く信長より車轉
り望志より世に申すと見よ
長より其内より本願より本願
上田城を移りて依く派田と

深く持より次男友重の依の
妻室より石田三成が妻とい姉妹
あり仍て西條派一又太閤の
恩威ありひこのうびに御あり
秀頼乃下知中心得るるあり
又嫡子伴長等の本多が聲は
して
家康公より列
して湯急は千一子石田

沿りて沿田の城より沿居せり
敵流より向くは皮上松追討の
出陣仕るが石田が僅從の
状を見く門退し一敵軍
ありしよりとりあはるは是は誤り
ありし所仕る肉より入りし
新を来りて自由し門退す

事此集るべきや乞軍法く
甚ぶ疎まざるの之見作是也
の深く
肉府公之忠
身を奉ると又一流より安座する
運致支駕事斗つて二人の
是身も在りし分け戦が
一方の立んとの代略ありと
りし中より左衛門のりる

あゝ心え来安房書いころあ
一筋として未練の心懸るる
くろくは随分と心とそ
—父子兄弟一雨よるらん
—又と書く— 調略しけ
ども倅夏書も又義心鉄石の
如くよそ一知きは書るる
そ飛毛るるなり

能くも倅夏書るるは安今津に
御徳乃是悟し出るるは時
いり安房書い信幸と唱んぐ
いり指この新し他人とあ
父子三人乃お徳あり今下
さぞぞり会乱と成り石田之娘
承りて大坂へをり
肉膚公談をらんあるなり

我法くぐくと考へんるなり
徳川殿も名将として結ぶ年を
とひし武勇揚ぎてこの内方として
大玉を降し武略此家長多し
さればは君なり並ぶ人なきの合意
あるは我古主信玄公より別きく
りり孤立して
徳川殿より
志すぐらば結ぶなり
志願の内意

さて本願地安堵も今又幼年
此秀頼も頼朝より武門の西
目之一家と云して上田の城
楯籠り江戸
中納言房
上洛を押しこの度の軍
命れぬの楯も是なりと急度
中納言より去れば真田安堵も
ハ
内府公より叶はるる

まといわるとあることいふは知事
この秀頼の由緒みりごとく
甚しく古太陰の由緒又石田といふ孫
を絶しし中存義以ては度々
冥途は由緒討ち極め是等の
子孫を呼んでは理をかせ
あり時々併是等々み出さるる
らるる事しるの本多貞徳等の妹

を妻よ持は縁し門きくや
よの由緒明く在妻のいふも
離別仕るの由易くは縁は女房
手門さるは理しるは近手
其しるの由緒本多父は此御意
成列して厚く慕むり知り
一万二子石田結りりは是全く
事し武勇智謀も所は

又本多が縁えんくくくくも何と
貞父ちかちちの弟あにお修おしゆよ
宮森みやもりの時とき方かた々々べしその
御心ごこころ慮りえし某あなに既まづ知しれり
今年ことし宮森みやもりの徳とく大おほ名な堂どうを
同おなじくする之これ徳とく色いろばりの御ご恩おん
も忘却わすれ仕つかり難がたし只ただまげて
父ちちの弟あに依よ継つぐの徳とくも同おな東とう乃の時とき

旨旨に集あり父子ちちこ三人さんにん忠ちゆう誠せい誠せいに
さば是これ某あなが頭あたま力ちから也なりありや
操さう返へんくくして徳とくめりんば安やす房ぼう書かき
是これと考かんがえく大おほい子こ怒いかり徳とくふ
汝なんぢら宮森みやもりの命いのちよ志こころさぐり
父ちちが首くび切き討うちべし中なかつらるらるは
バ信しん者もの登のぼり武ぶ門もんの習ならひ
小こ勝かつんでい必かならずく父子ちちこ見み交あう

味方と放りぬとも振う祝と討
屋まや保えぬ取のどろく義朝
此不義ふ孝く習りんや鬼子
角く曲て冥途へ入りぬる
と忠節あけり

幸村義言父子兄弟義朝も別る夏
秀忠は御を廢位取大御よ

御忌陣の事

時中左馬の依幸村をみ出く
中の父幸一祈く放りぬる
て敵と放りぬるが事
の兄とるや中より保
兄は能く守りぬる
代も武田家子仕へく大悪

徳川より終るなり

徳川亦古より信言此歌也
我予於天下此安危もも
我予又南時父乃心慮とつ
おの腹と冥東の西歌もゆや又
そよ所の西所のふも
徳川亦此の思毛りごと
あらの我のの思候もつともた

もよぶまのちるなり
の我士ああ又今年に
終りり事とる意
は第二ころの
終るべ何の内お
ち度とる冥東此
あへ事とる父と
ぬりて終る事一

志^ちる中^{ちゆう}に孫^{まご}を此^{こゝ}次^{つぎ}者^{もの}ありと
中^{ちゆう}さんく^く契^{あひ}よ入^いりねば作^しる
いふ者^{もの}より車^{くるま}ふ沼^{ぬま}田^のの城^{しろ}より
多^{おほ}分^{ぶん}が去^さ馬^ばと個^{こゝろ}へ是^{こゝ}今^{いま}津^つ山^{さん}陣^{じん}
へも出^でるせんして

内^{うち}府^ふ公^{こう}の由^{よし}前^{まへ}へ出^でくやしる
このう^うび父^{ちち}安^{やす}房^{ぶどう}ちる妻^{つま}の依^よ
とも送^{おく}らん依^よりて西^{にし}出^でがこ^こあつ味^{あじ}

仕^しは乞^{こゝろ}ふ依^よて私^{わたくし}に依^よる沼^{ぬま}田^の
在^あ在^あ城^{しろ}仕^しり押^{おし}へ中^{ちゆう}へま^まあ^あく人^{ひと}
そのうち^{うち}に調^{しら}畧^{りやく}を以^{もつ}て行^い年^{ねん}
味^{あじ}方^{かた}ふ依^よるへま^まありと中^{ちゆう}へ
る申^{まを}す 河^か妻^{つま}公^{こう}も委^い任^{にん}の
河^か妻^{つま}届^{とど}け有^ありとの部^ぶて
秀^{ひで}忠^{ただ}々^々々^々小^こ陸^{りく}及^{およ}び河^か進^{しん}發^{はつ}之^の
兼^{かみ}て 家^{いえ}康^{やす}公^{こう}の由^{よし}を

定め有先陣を柳原康政有り
此所先く續く西くくも本石垣
古交他石城前也 酒井左兵衛
日根野瓶後也 石川主度同く
古苗原あり又より御籠本
原くくく百々せし又徳代也
めんくく本多依源也 牧野
右馬介 酒井左衛門尉 松平純

伴与松平石見也 本平隠岐也
同く城中也 松平和泉也 松平
重信也 永井左近也 成瀬
年人正 安房帯刀 奥平昌徳也
本平和石澤代乃端大名飛巻
のめんくく 大石青組 大石青組
等近於合也 石勢三万八千金騎
とく水陸及也 御を發有

